

牛の悪性水腫

6 か月から 3 歳齢までの牛に好発する本病は、クロストリジウム属菌(C)の感染により肩や腰部の皮下組織に水腫が観察される病気であり、ときに隣接する骨格筋の出血や気腫を伴います。*C septicum*、*C chauvoei*あるいは*C novyi*が主な起因菌ですが、皮膚の損傷部や分娩後の子宮内膜などから侵入します。病牛は発熱、歩行異常を示し、多くは急性経過で死亡します。ワクチンにより容易に予防できますので、過去に死亡牛がクロストリジウム感染症と診断されたことのある農場では、牛クロストリジウム 5 種混合ワクチンの活用を勧めます。ワクチンは最初に 1 か月間隔で 2 度接種し、その後は 6 か月毎に 1 度接種します。

平成 17 年 10 月に、管内の乳牛 1 頭(3 歳)が分娩 2 日後に左側臀部が腫れて起立不能となり、翌日に死亡しました。剖検により、腰部の皮下組織と骨格筋に水腫、気腫および出血がみられました。水腫は胸部の皮下組織にも存在しました。*C septicum* の遺伝子が骨格筋の病変部と分娩後の炎症を示す子宮内膜から検出され、本病と診断しました。子宮内膜から侵入した同菌が骨格筋で増殖し、毒素が産生されて牛を急死させたと思われます。畜舎を消毒し、同居牛に前述のワクチンを接種して、その後の発生を防ぎました。

(岩手県中央家畜保健衛生所 病性鑑定課)